渡辺 紀子（わたなべ のりこ）

動物がいてくれて～開けてびっくり玉手箱

動物の世話や農作業に明け暮れながらも、日々あっけらかんと駆け回るきかんぼサキ。動物がいてくれたお陰で、サキノは思いがけない楽しみを見つけてしまう。その楽しみとはいったい…

ニワトリ 10 羽とヤギ 1 匹がいることで、栗田家では卵と乳を口に出来ない日はなかった。でも村の中ではニワトリもヤギも飼っていない家が多かった。サキノは学校に行くようになると毎日弁当持ちだったが、弁当に必ず毎日入っていたもの、それが卵焼きだった。ちなみにサキノの弁当生活は、最初から最後までずっとおかずは卵焼き一品という弁当だったようだ。当然ながら、それを恥ずかしいと思うような考えは全く無い。日々友達とワイワイ食べていた。

その頃のこの村の子供たちにとって、卵焼きは滅多に口に出来ない食べ物だった。それは金持ちの家の子ですら、そうそう食べることのないものだった。サキノは何も考えず、ただ与えられたものを食べていただけだったのだが、その弁当はたちまち学校中で知らない人がいないものになったという。

学校では教室のストーブのところに、みんなの弁当をまとめて置いておくものだった。冬になると火が入るから、そこで温まった弁当が食べられる。当時の子供たちは、昼まで待っていられないで早弁。そして本当の昼の時間にも、別に持ってきたイモ、カボチャなどを食べる。そんな子が多かったようだ。サキノの卵焼きは、早弁の人たちから早いもの勝ちで狙われる、大人気のおかずだった。

「卵焼きは確かにうまいもんだが、毎日だも、さすがに飽きっぺ。そしたら周りはうんと羨ましかったみたいなのな。知らない間に学校中で有名になったらしくて、分かんねぇうちに誰かれなく卵焼きとっていく。それで、代わりにとった人の弁当のおかず入れておいてくれんのや。あとで卵焼き貰ったぞ！って報告してくれる人もいたが、たぁだ交換だけしてた人もいっから、誰なんて分かんねぇ。そんなのいちいち構ってられねぇわい。そぉだことより、毎日弁当のふた開けっと、ふだん食うよねぇ肉、魚なんて入ってんだぞ。今日はいったい何入ってんべって考えっと、いや～楽しくて楽しくてワクワクしたわい！」

嬉々として昼食に臨んでいたであろう、サキノの姿が想像できる。願ったり叶ったりの物々交換。それも動物がいてくれたから。動物をあつかうことは、どんなにか大変だっただろうに、その苦労話がやけにさらっとしているのも、時にこんなときめきをご褒美にもらったからかもしれない。少し腑に落ちた気がする。

自分のものと他人（ひと）のもの、平等と不平等、学校生活のルール、今ならいろんなことを正されてしまうのかもしれない。でも大らかな学校生活の中で、子供たちは人間らしくきらきら輝きながら、分け合う喜びを謳歌している。